

# ドイツ語の be-動詞表現

## — 対格化をめぐる —

成田 節

(東京外国語大学外国語学部教授)

### 1. はじめに

小論の目的は、ドイツ語の *beladen* (積む), *bewohnen* (住む), *beantworten* (答える), *beschenken* (贈る) のように、接頭辞 *be-*を持つ動詞 (以下本稿では「*be-*動詞」と呼ぶ) の統語的特徴と意味的特徴の根底にある原理を捉えることである。その際、*be-*動詞表現に見られる**対格化** (Akkusativierung), およびそれに伴う**焦点化** (Fokussierung) をキーワードとして考察する。<sup>1</sup> 対格化とは、例えば下の (1) a と (1) b のペアに見られるように、対応する基礎動詞 (接頭辞を伴わない動詞) の表現では対格目的語にならない項 — (1) b では前置詞句 *auf den Wagen* — が *be-*動詞表現では *den Wagen* のように対格目的語として表されることを言う。

まず、*be-*動詞表現の主なタイプを見ておく。各ペアの a は *be-*動詞表現, b は対応する基礎動詞表現である。その下に、それぞれのタイプに属する類例をいくつか挙げておく。(それぞれ対格化された目的語および和訳の対応部分に下線が、また、基礎動詞表現で *be-*動詞の対格目的語に対応する部分には点線の下線が付けてある。)

### A. *be-*動詞の対格目的語に基礎動詞の場所成分 (Lokalphrase) が対応

- (1) a. Er *belädt* den Wagen mit Heu. 彼は車に干草を積む。

彼<sub>主</sub> be-積む 車<sub>対</sub> with 干草

- b. Er *lädt* Heu auf den Wagen. 彼は干草を車に積む。

彼<sub>主</sub> 積む 干草<sub>対</sub> on 車

類例: das Grundstück mit Häusern bebauen 土地に家建てる (*Häuser auf dem Grundstück bauen*), die Wand mit Bildern behängen 壁に絵を掛ける (*Bilder an die Wand hängen*), den Blumenkasten mit Stiefmütterchen bepflanzen プランターにパンジーを植える (*Stiefmütterchen in den Blumenkasten pflanzen*), jemanden mit Eiern bewerfen 人に卵を投げつける (*Eier auf jemanden werfen*) ...

- (2) a. Sie *bewohnen* ein altes Haus. 彼らは古い家に住んでいる。

彼ら<sub>主</sub> be-住む 古い家<sub>対</sub>

<sup>1</sup> このテーマについては、成田 (1990) および Narita (1992) として論考を発表したことがあるが、その後発展したデータ検索方法も適宜利用し、また認知言語学の用語との擦り合わせも視野に入れながら再考する。

b. Sie wohnen in einem alten Haus. 彼らは古い家に住んでいる。

彼<sub>主</sub> 住む in 古い家

類例: das Land bereisen その国を旅行する (ins/durchs Land reisen), den Turm besteigen 塔に登る (auf den Turm steigen), das Zimmer betreten 部屋に入る (ins Zimmer treten) ...

## B. be-動詞の対格目的語に基礎動詞の（場所成分以外の）前置詞句が対応

(3) a. Er beantwortet die Frage. 彼はその質問に答える。

彼<sub>主</sub> be-答える 質問<sub>対</sub>

b. Er antwortet auf die Frage. 彼はその質問に答える。

彼<sub>主</sub> 答える on 質問

類例: den Verstorbenen beweinen 死者を悼んで泣く (um den Verstorbenen weinen), jemanden bekochen ある人に料理をしてやる (für jemanden kochen), die Ratschläge beachten 助言を守る (auf die Ratschläge achten), etwas besprechen ある事を協議する (über etwas sprechen), etwas bezweifeln ある事を疑う (an etwas zweifeln) ...

## C. be-動詞の対格目的語に基礎動詞の与格目的語が対応するタイプ

(4) a. Er beschenkt sie mit Blumen. 彼は彼女に花を贈る。

彼<sub>主</sub> be-贈る 彼女<sub>対</sub> with 花

b. Er schenkt ihr Blumen. 彼は彼女に花を贈る。

彼<sub>主</sub> 贈る 彼女<sub>与</sub> 花<sub>対</sub>

類例: jemanden mit Waren beliefern 人に品物を配達する (jemandem Waren liefern), jemanden des Schmucks berauben 人から宝飾品を奪う (jemandem den Schmuck rauben), jemanden bestehlen 人に盗みをはたらく (jemandem etwas stehlen), jemanden bedrohen 人を脅す (jemandem drohen), jemanden beraten 人に助言する (jemandem raten) ...

## D. be-動詞の対格目的語に対応する項が、基礎動詞表現に通常は現れない

(5) Der Fremde begähnt die Witze. (Günther 1974: 166, gähnen は 1 価動詞)

定-よそ者<sub>主</sub> be-あくびをする 定-ジョーク<sub>対</sub> ⇒ ジョークが退屈なのであくびをする。

(6) Ich werde die ganze Vorstellung behusten. (husten は 1 価動詞)

私<sub>主</sub> だろう 定-全体-上演<sub>対</sub> be-咳する ⇒ 私は上演の間中、咳をするだろう。

(7) Bush hat **gelogen**. US-Präsident George W. Bush hat nach einem Bericht der «Washington Post» möglicherweise vor Beginn des Irak-Kriegs bewusst die Öffentlichkeit belogen.<sup>2</sup>

ブッシュは嘘をついた。合衆国大統領ジョージ・W・ブッシュは「ワシントンポスト」の報道によるとイラク戦争の前に意図的に世間一般に嘘をついた可能性がある。

<sup>2</sup> <http://kantel.server-wg.de/rollberg/archives/001399.html>

以下、第2節で、先行研究の内、特に Günther (1974) と Eroms (1980) の要点を整理し、第3節では、焦点の概念を明確に規定しながら、be-動詞表現に観察される意味的・用法的特徴の原理についての解釈を再度提示する。第4節では、その解釈を支持する論拠を挙げ、第5節では、しばしば議論される意味的特徴が焦点化に基づいてどのように説明できるかを述べる。第6節では言語研究の方法に、また第7節では、be-動詞表現が交替と言えるかどうかという問題にも触れる。

## 2. 主な先行研究

be-動詞については、すでに多くの研究があるが、ここでは本稿での考察にとって重要であり、かつ現代の be-動詞研究の出発点を成していると考えられる Günther (1974) と Eroms (1980) を取り上げ、それぞれの要点を確認しておく。<sup>3</sup>

### 2-1. Günther (1974)

Günther (1974) は、「現代ドイツ語における BE-動詞の体系. ドイツ語文法におけるレキシコンの構造」という表題にも現れているように、ドイツ語の be-動詞を網羅的に取り上げ、統語的・意味的観点から類型化し、語彙（の一部）の体系的な記述を目指したものである。類型化および記述に際して、Günther (1974: 39) は以下の3つの方針を立てている。

- (a) 中心に置くのは、基礎動詞と派生動詞 (be-動詞) の関係ではなく、派生動詞相互の系列的関係 (paradigmatische Beziehung) である。つまり、be-動詞が形成されるプロセスではなく、(潜在的なものも含めて) ドイツ語に存在する be-動詞相互の体系的関係を捉えることを目的とする。
- (b) 形成された動詞は統一体と見なす。接頭辞と基礎動詞を切り離してそれぞれの意味を抽出するということを目的とはしない。
- (c) 体系的記述に際しては、be-動詞が用いられる統語的・意味的環境の共通性（すなわち同じ構文で用いられるかどうかということ）および be-動詞自体が持つ意味の共通性（すなわち同じ意味タイプに属するかということ）をベースとする。

このような方針に基づき、I. BEDECKEN (Hans bedeckt den Käfig mit einem Tuch. ハンスは鳥かごを布で覆う)、II. BEFLAGGEN (Sie beflaggen den Mast. 彼らはマストに旗を付ける)、III. BEARBEITEN (Der Handwerker bearbeitet das Werkstück. 職人は製作物を加工する)、IV. BESCHAUEN (Er beschaut sich das Bild. 彼は絵をまじまじと見る)、V. BESPRECHEN (Sie

<sup>3</sup> Günther (1974: 1ff.) は Jacob Grimm の Deutsche Grammatik (1826) から P. von Polenz の Ableitungsstrukturen deutscher Verben (1968) までは概観し、Eroms (1980: 15ff.) は Günther (1974) を踏まえ、その後の研究をも補う形で、初期の格文法の枠での研究 (D.A. Becker: Case Grammar and German *be*, 1971) や独英対照の観点からの研究 (Pusch 1972) などまでを総括している。

besprechen die Maßnahmen. 彼らはその措置について協議する), VI. BEEINFLUSSEN (Der Vater beeinflusst seinen Sohn durch Drohungen. 彼の父親は脅して息子に影響を与えた=息子の考えを変えさせた), VII. VEREINZELTE BEDEUTUNGSGRUPPEN (少数の動詞からなる意味グループ) という7つのタイプに分類し、それぞれをさらに下位分類している。また、上記7つのグループの何れにも分類することができない be-動詞を VIII. LEXIKALISIERTE BE-VERBEN (語彙化した be-動詞) としてまとめている。

上の (a) に挙げたように、派生関係ではなく be-動詞相互の関連性を問題としているので、たとえば betrachten (観察する) のように、基礎動詞 trachten (得ようとする) と意味的には関連付けられない be-動詞でも, begucken, beschauen, besehen などの「よく見る・熟視する」という意味のグループに分類されている。逆に, beantworten (～に答える) などは、基礎動詞 antworten (答える) との間の意味的関連は明白だが、類似の be-動詞がないという理由でグループ VIII に入れられている。<sup>4</sup>

## 2-2. Eroms (1980)

Günther (1974) が基礎語との派生関係ではなく、語彙の部分的体系としての be-動詞相互の関連を記述したのに対して、Eroms (1980) は be-動詞表現と基礎動詞表現の構文的な対応関係に注目し、be-動詞表現に見られる**対格化** (Akkusativierung) を中心に据え、これを軸にして、be-動詞表現の構文的及び意味的特徴を論じている。対格化とは、基礎動詞表現では主に前置詞句で表される項が、be-動詞表現では対格目的語として表されることを指している。<sup>5</sup>

対応する基礎動詞表現との意味の違いとして、関連文献でもしばしば言及されている「全体的解釈」 (holistische Interpretation) — 例えば Opa wohnt in der ersten Etage. (祖父は2階に住んでいる) とは異なり、場所が対格として表されている Opa bewohnt die erste Etage. (祖父は2階に住んでいる) では「2階全体」が含意される — や、継続相・完了相といった動作様態 (Aktionsart) の違いなどを、主に作例のペアを示しながら確認した上で、これらの意味的特徴は全て前置詞句の対格化および対格化による項の**焦点化** (Fokussierung) に還元できるという解釈を提示している。「有標・無標」ということに関しては、当然のことながら、基礎動詞表現に対して be-動詞表現は常に有標表現であると捉えている。

また、be-動詞表現の大部分は基礎動詞表現から場所句 (Lokalphrase) の**トピック化** (Topikalisierung) という統語操作によって派生されると捉えているところが Günther (1974) との大きな違いである。つまり Eroms は、能動文から受動文が派生されるように、基礎動詞表現から統語的操作によって be-動詞表現が派生されると考え、両表現の関係を

<sup>4</sup> Günther が lexikalisiert (語彙化した) と言っているのは厳密に言えば, bekommen (もらう) など、基礎語 (kommen 来る) との間に意味的な関連も見られず、何れかのグループに入れることもできない be-動詞である。

<sup>5</sup> なお、基礎動詞表現に限らず、Die Werft versieht das Schiff mit Kiel. (造船所が船に竜骨を付ける) のような基礎名詞表現と Die Werft **bekieft** das Schiff. (造船所が船に竜骨を付ける) のような be-動詞表現の対応関係も同じように「対格化」と捉えている。また、基礎動詞表現では通常は表示されない項が be-動詞表現では対格目的語になるような対応関係 (例: lügen 嘘をつく—jemanden belügen 人に嘘をつく。例文 (7) も参照) も扱われている。

「態の転換」(Konversion)の一種と捉えているのである。<sup>6</sup>

さらに、be-動詞表現によって、さまざまな文脈に応じた表現の可能性が広がるという点を指摘している(S. 49ff.)ことも重要である。たとえば、schenken ならば Man schenkt Rosen. (バラを贈る)というように常に「何を贈るか」を明示しないと文が成立しないが、be-動詞表現ならば Man beschenkt die Kinder. (子供たちに贈り物をする)というように、「何を贈るか」を言わずに済ますことが可能となる。このような観点をもつことは、不自然な作例のペアを用いて、対応する基礎動詞表現との「意味の違い」を無理に見出そうとする(しばしば無駄な)努力に対するブレーキとして働くと考えられる。

### 3. be-動詞表現の本質は対格化に伴う項の焦点化である

#### 3-1. be-動詞表現における「焦点化」とは

Eroms (1980) は be-動詞表現に見られる意味の諸特徴を主に**焦点化**(Fokussierung)という概念を用いて説明しようとしている。このことは論述全体から読み取れるが、焦点化あるいは**焦点**(Fokus)という概念の規定がされてなく、全体として用語が明確であるとは言えない。例えば、ある箇所では„Fokussierung oder Topikalisierung“ (焦点化あるいはトピック化, S. 22) のように焦点化とトピック化を同列に扱い、また別の箇所では„Fokussierungen nach der Thema-Rhema-Gliederung“ (テーマ・レーマ分節に従った焦点化, S. 56) のように、焦点化をテーマ・レーマ分節のレベルに位置付けている。このように、術語の使用に関しては少なからぬ混乱が見られる。<sup>7</sup>

確かに Fokus/Fokussierung, Topik/Topikalisierung, Thema/Thematisierung という術語は研究者によって様々な意味で用いられているようだが、ここでは主として Polenz (1985: 290ff.) に依拠して概念の整理をし、焦点・焦点化という概念をどのように規定したら、be-動詞表現の意味を最も的確に捉え得るかということを考察する。<sup>8</sup>

まず**トピック化**(Topikalisierung)だが、術語の使用には一貫性が欠けているにも拘わらず、Eroms (1980) 全体を見渡せば、基礎動詞表現では主に前置詞句として表示される項を be-動詞表現で対格目的語に「格上げ」する統語的操作をトピック化と言っているということが読み取れる。このことは„Topikalisierungstransformation“ (S. 48) あるいは„Topikalisierungsoperation“ (S. 55) という表現にも現れている。Bußmann (2002: 704f.) などの言語学辞典に見られる「主語以外のある文要素を文頭へ移動させる操作」とは違う意味だが、ある文要素を卓立させるための統語的な操作という点では同じだと言える。いずれにしても be-動詞表現の意味的な特徴を捉えるための「焦点化」とは別のレベルの問題

<sup>6</sup> さらに Eroms (1981) は、「前置詞句>対格目的語>主格主語」という序列に基づき、能動文の対格目的語が受動文では主格主語に格上げされるように、基礎動詞表現の前置詞句が be-動詞表現では対格目的語に格上げされると捉え、「通常」の受動を「第一レベルの受動 (Passiv erster Stufe)」, be-動詞表現を「第二レベルの受動 (Passiv zweiter Stufe)」と特徴付けている。

<sup>7</sup> なお、Eroms (1980) と Günther (1974) の立場の違いを主に論じている Günther (1987) では、対格化という統語的操作も含めて、一貫して thematisieren (テーマ化, 主題化) という用語が用いられているが、これも適切とは言えない。

<sup>8</sup> この問題については成田(1995)で視点 (Perspektive) 概念との関連で考察している。

だと考えるのが妥当である。従って以下の議論では焦点(化)とテーマ(化)の区別を中心に置く。

文意味は様々な側面から考察し得るが、Polenz (1985: 290ff.) は何に重点を置いて出来事を表し、それを受け手に伝えるかという意味での**焦点形成(Fokusbildung)**について考察するにあたり、3つのレベルを区別することが必要だと説く。つまり、第1のレベルでは、言語外のある出来事に関わる諸要素(事柄の参与者)の内、どれが文中に表示されるかという点だけが問題となり、第2のレベルでは、この文中に表示される諸要素の内、どれに主な関心を向けて文が構成されるかが問題となり、第3のレベルでは、文中に表示される諸要素がどのように受け手に伝えられるかが問題となる、というのである。この内、本節での議論、すなわち焦点(化)とテーマ(化)の区別にとって特に重要なのは、第2のレベルと第3のレベルの区別である。

Polenzはこの2つのレベルの区別を、能動文と受動文の違いを例にして説明している。

„Diese Umkehrung (...) dient der Änderung des Fokus/Brennpunktes der Aussage, d.h. der Gewichtung in Bezug auf das primäre Interesse. In der Form des Aktiv-Satzes (...) geht man vom AGENS aus (Subjekt) und sagt dann etwas über das OBJEKT aus. Im Passiv-Satz geht man dagegen vom OBJEKT aus. (...) Dies ist eine Verschiebung der Gewichtung noch unterhalb der Thema-Rhema-Struktur der 3. Ebene.“ (Polenz 1985: 291) 「この転換は(...) 発言内容の焦点、すなわち主な関心の置きどころを変更するために行われる。能動文では(...) 動作主を基点として(主語として)対象についての叙述を行う。これに対して受動文では対象が基点となる。(...) これは第3レベルのテーマ・レーマ構造より下のレベルにおける重点の移動である。」

引用の最後にあるように、Polenzは能動態と受動態のような態の転換による焦点の変更をテーマ・レーマ構造とは別のレベルの問題と見ている。この第2レベルの焦点化と第3レベルのテーマ・レーマ構造という区別と同じ考え方は、Helbig (1992)やWelke (1993)にも見られる。

Helbig (1992: 58ff.)は、事柄を表現・伝達する際の**視点(Perspektive)**について、**文意味上の視点(satzsemantische Perspektive)**と**伝達上の視点(kommunikative Perspektive)**を分けることが必要だとして、次のように述べている。能動態と受動態の違いは「同じ事柄に対する異なった見方」<sup>9</sup>の違いである。受動文には動作主が表示されないことが多いことから、受動態は一般に「動作主から目をそらした(agens-abgewandt)」表現だと特徴付けられているが、これは文意味上の視点の問題である。一方、受動文で動作主が表示されている場合には、動作主が新情報の焦点であることが多いということもよく指摘されるが、これは伝達上の視点の問題である。つまり、テーマ・レーマ構造は伝達上の視点のレベルでの問題であり、能動態と受動態の見方の違いは文意味上の視点のレベルでの問題であると

<sup>9</sup> Helbig (1992: 59) は „unterschiedliche Blickrichtungen, Schweisen oder Perspektiv(ierung) auf das gleiche Geschehen“ (同じ事柄への異なる目の向け方、見方、視点)と表現している。

いうのである。そして、be-動詞における対格化に伴う視点の変更も文意味のレベルに位置付けている。このように、文意味上の視点は Polenz における焦点形成の第 2 レベル、伝達上の視点は第 3 レベルに対応する。

Welke<sup>(2)</sup>1993:89ff.)は第 1 次テーマ化 (primäre Thematisierung) と第 2 次テーマ化 (sekundäre Thematisierung) と呼んで当該の 2 つのレベルを区別し、能動態・受動態の他に、a ~ d のような対称関係を表す表現を挙げて、この第 1 次テーマと第 2 次テーマの違いを説明している。

- (8) a. Frankreich grenzt an die Schweiz. フランスはスイスに接している。  
b. Die Schweiz grenzt an Frankreich. スイスはフランスに接している。  
c. An Frankreich grenzt die Schweiz. フランスにスイスは接している。  
d. An die Schweiz grenzt Frankreich. スイスにフランスは接している。

Welke によれば、4 つの文が表している現実の事柄は同じである。そして第 2 次テーマ、すなわちテーマ・レーマ分節のレベルでは、a と c は Frankreich がテーマであり、b と d は die Schweiz がテーマであるという点でそれぞれ等しいが、a と c あるいは b と d の文意味がそれぞれ完全に同一だということにはならない。たとえば c と違い a の Frankreich は主語であることにより、第 1 次テーマ、すなわち状況描写に際して最も際立たせる対象として描かれている。この点で a と c の意味は異なるというのである。b と d の違いも同様に説明されている。<sup>10</sup>

Welke の第 1 次テーマは、実質的には主格主語に認められる(と Welke が考える)意味機能を指しているようで、対格目的語あるいは対格化は論じられていないが、主格主語の意味機能のレベルとテーマ・レーマ分節のレベルを明確に区別するという点では、Polenz の第 2 レベルと第 3 レベルの区別と共通の認識だと言える。<sup>11</sup>

以上見てきたレベルの区別を前提とし、適宜先行研究の関連箇所を辿りながら、be-動詞表現における対格化の意味的機能を説明するための「焦点」の概念を、成田 (1990) を基にして再度提示する。

まず、Polenz (1985: 180ff., 291) によると、能動態と受動態の他に、次の (9) から (11) のペアのような逆関係表現 (Konversen) にも、この第 2 のレベルでの焦点の変更が見られ

<sup>10</sup> Welke の第 1 次テーマは、認知言語学の用語で言えば「トラジェクター」に相当する。辻編 (2002: 137, 171f.) および河上編著 (1996: 121ff.) 参照。

<sup>11</sup> さらに、Polenz の第 2 レベルと第 3 レベルの区別に相当すると思われる考え方は、日本語の態に関する寺村 (1982: 208ff.) の叙述にも見られる。

(1a) 太郎ガ浜辺デ亀ヲツカマエタ

(1b) 亀ガ浜辺デ太郎ニツカマエラレタ

(2a) 太郎ガコノ亀ヲツカマエタ

(2b) コノ亀ハ太郎ガツカマエタ

寺村は日本語の能動態と受動態について、能動態の (1a) は仕手「太郎」を主役として描き、受動態の (1b) は受け手の「亀」を主役として描いている、という説明をした後で、能動態・受動態の格の移動に伴う「関心の移動」と、(2b) のような「亀」を主題として取り立てた文における「関心の移動」との違いに言及している。「つまり、上に比喩的に「主役」⇔「わき役」の移動と言ってきた、「格の移動」は、確かに話し手の関心の移動ということではあるが、それは一文の主題としてどれかの補語を取り立て、題述文を構成するということとは区別されねばならない。」(寺村 1982: 210)

るということである。<sup>12</sup>

- (9) a. x ist ein Freund von y. x は y の友達だ。  
b. y ist ein Freund von x. y は x の友達だ。
- (10) a. x kauft y von z. x は y を z から買う。  
b. z verkauft y an x. z は y を x に売る。
- (11) a. x klebt y an z. x は y を z に貼る。  
b. x beklebt z mit y. x は z に y を貼る。

例えば (9) a は x を焦点とする表現、つまり「x について、y の友達である」と述べる表現であり、(9) b は逆に「y について、x の友達である」と述べる表現であるとしている。同様に (10) a は「x について、y を z から買う」、(10) b は「z について、y を x に売る」という表現だとしている。(9) と (10) は主語の交替に伴う焦点変更の例だが、(11) は対格目的語の交替に伴う焦点変更の例である。(11) a も b も共に「x について」述べる点では同じだが、a が「y について、z に貼る」という述べ方をしているのに対して、b は「z について、y を貼る」という述べ方をしているということになる。

これと同じ内容の説明は、be-動詞表現についての Wegener (1985: 175) の叙述にも見られる。Wegener は、与格目的語を伴う jemandem etwas stehlen/liefern/schenken (人から物を盗む/人に物を届ける/人に物を贈る) などの基礎動詞表現と、対格目的語を伴う jemanden bestehlen/beliefern/beschenken (人から盗む/人に届ける/人に贈る) などの be-動詞表現を比べ、be-動詞表現では、「盗む」「届ける」「贈る」という行為を、その行為の対象物ではなく、行為の向けられる相手の方に「注目を向けさせる (auf ihn Aufmerksamkeit lenken)」表現であると特徴付けている。<sup>13</sup>

主に以上のような考察に基づき、成田 (1990:118) では「焦点」を次のように規定した。

「be-動詞表現は 4 格目的語になる項に『焦点』を合わせる表現である、と言うときの『焦点』は『主にどの項に目を向けて事柄を捉えるか』という意味での『注目の焦点』である。たとえば (1a) (=Er hängt Bilder an die Wand.) が『絵を壁に掛ける』という行為を『掛ける物』の『絵』に目を向けて捉えているのに対して、(1b) (=Er behängt die Wand mit Bildern.) は『絵』ではなく『掛ける場所』の『壁』の方に目を向けて同じ行為を捉えているということになる。」

この意味での焦点は、喩えて言えば「カメラのファインダーを覗いて焦点を合わせる」というときの焦点を思い浮かべればイメージしやすいと思われる。そして「焦点を合わせ

<sup>12</sup> (9) (10) についての説明は、(8) を例に Welke が述べていることと実質的には同じことである。

<sup>13</sup> 同様に Welke (1988: 70f.) も Er hat ihm etwas gestohlen. (彼はその人から物を盗んだ) に対して Er hat ihn bestohlen. (彼はその人に対して盗みをはたらいた) においては、物を盗まれる人を「視点化する (in Perspektive bringen)」と言っている。この „in Perspektive bringen“ を Welke は別の箇所では „hervorheben“ (際立たせる) と言い換えている。



る」ことを以下の考察では「焦点化」と呼ぶことにする。また、繰り返しになるが、テーマ・レーマ分節のレベルでの「新情報の焦点」とは意味が異なるという点を強調しておきたい。<sup>14</sup>

### 3-2. 認知言語学の用語で言えば「前景化」foregrounding に相当

さて、上で再提示した焦点化の概念は、認知言語学の用語で言えば**前景化** (foregrounding) に相当すると言えるだろう。辻編 (2002: 137) では、「芝刈り機の歯の一枚が石に当たって、飛び跳ねた石がガラス窓を壊した」という出来事を言語化した2つの表現 *I've broken the window.* と *A stone has broken the window.* を挙げ、前景化を以下のように説明・規定している。

「前者 (= *I've broken the window.*) はこの出来事の中での『私』の役割を前景化し石の役割を背景化した表現、後者 (= *A stone has broken the window.*) は石の役割を前景化し『私』の役割を背景化した表現である。

このように前景化とは、所与の対象・事態の一側面が注意・関心の焦点となって描かれることである。他方、背景化は注意・関心の焦点からはずれて背後に退く側面であり、認知的に前景化を補足する効果を持つ。」

また Maylor (2002: 39ff.) も — 派生動詞の生成メカニズムを形式的に記述しようとしているなど、全体的な枠組みとしては本稿で目指すものとは別の方向の考察であるようだが、*laden* と *beladen* の対応関係に関しては — 「干草 (Heu) を車 (Wagen) に積む」の Heu を図 (Figure), Wagen を地 (Ground) とし、*Er belud den Wagen mit Heu.* (彼は車に干草を積んだ) では**地の前景化** (foregrounding the Ground, S. 60ff.) によって *den Wagen* が対格になるというように、上述の解釈と同様な説明している。

なお、foregrounding はドイツ語では *in den Vordergrund rücken* (前面に出す) と表現されているようである。たとえば Dürscheid (1999: 251ff.) は *Die Post ist neben dem Sparkasse.* (郵便局は貯蓄銀行のとなりだ) と *Die Sparkasse ist neben der Post.* (貯蓄銀行は郵便局のとなりだ) などを例に *Figur-Grund-Strukturierung* (図地分化) について論じた流れで、*gießen* と *begießen* (注ぐ) の相違について次のように書いている。

„In (8b.) (= *Ich begieße die Blumen*) ist die im Akkusativ kodierte Rolle im Vergleich zu der alternativen Kodierung als PP (= *Ich gieße Wasser auf die Blumen*) in den Vordergrund gerückt. In (8a) gehört die PP in zweifacher Hinsicht zum Grund: Sie ist Grund in syntagmatischer

<sup>14</sup> 確かに Bußmann (2003: 218f.) などの言語学事典では Fokus を「新情報の焦点」という意味で規定していることが多いのだが、Leys (1989: 109) の „weil gegen den Fokus auf den Endpunkt des Trajektes richtet.“ (前置詞 gegen は軌跡の終点に焦点を向けるので)、および Oksaal (1972: 147) や Oksaal (1973: 166) のように、本稿で規定した意味で Fokus という用語が用いられることも少なくない。また日本語の「焦点」も、語義分析などで「アガルー到達点に焦点を合わせる。ノボル経路に焦点を合わせる」(柴田他 1976: 16) というように用いられ、さらに、英語の「壁塗り構文」を扱った影山編 (2001: 111) にも「行為連鎖の意味構造の中で意味的に重視(焦点化)される部分」というような用い方が見られる。

Relation zum Subjekt, und sie ist Grund in paradigmatischer Relation zur alternativen Kodierung als Akkusativobjekt.“ 「(8b) では、対格で表された役割(=Blumen 花)は、前置詞句としての表現(=auf die Blumen 花の上に)と比べて前景化されている。(8a)の前置詞句は二重の意味で「地」に属している。つまり主語とのシンタグマティックな関係でも「地」であり、対応表現の対格目的語とのパラディグマティックな関係でも「地」となっている。」

以上、成田(1990)で「焦点化」と呼んだ概念は、認知言語学の用語で言えば「前景化」に相当するということを確認した。<sup>15</sup>

### 3-3. 対応表現の動詞が自動詞の場合

ここまでは *beladen* と *laden* のように 3 価の動詞について焦点化の概念を考察してきた。3 価の動詞の場合は、主語となる項以外の 2 つの項について、どちらに焦点を合わせるかということが問題にできる。たとえば *Er belädt den Wagen mit Heu.* (彼は車に干草を積む) ならば *Heu* (干草) ではなく *Wagen* (車) に焦点が合わせられるというような対比的な言い方が可能である。では、(12) の *bewohnen* と *wohnen* や (13) の *beantworten* と *antworten* のような 2 価の動詞の場合はどうだろうか。

- (12) a. Sie bewohnt ein altes Haus. 彼女は古い家にすんでいる。  
b. Sie wohnt in einem alten Haus. 彼女は古い家にすんでいる。  
(13) a. Er beantwortet die Frage. 彼はその質問に答える。  
b. Er antwortet auf die Frage. 彼はその質問に答える。

2 価の動詞の場合、主語となる項以外に項は 1 つしかないので、対格化によって「XではなくYに焦点が合わせられる」という言い方はできない。この場合は、対応する表現では背景に埋もれている側面(つまり基礎動詞表現では前置詞句で表される項)が、*be*-動詞表現では前景化され、対格目的語として表されていると考えられる。これと同じ解釈は Dürscheid (1999: 265f.) にも見られる。それによると *Peter reist durch das Land.* (ペーターはその国中を旅する)の前置詞句 *durch das Land* と *Peter bereist das Land.* (ペーターはその国を旅する)の対格目的語 *das Land* を比べると — 3-2 の Dürscheid の引用と同じくパラディグマティックな意味で — 前者が「地」、後者が「図」という関係にあるということである。次の例文のペアでは、基礎動詞表現 (14) b と (15) b で言語化されていない要素が、*be*-動詞表現 (14) a と (15) a では必須成分の対格目的語として言語化されているが、このようなペアには対格化による前景化という特徴がさらに明らかに見て取れる。

<sup>15</sup> なお Dürscheid (1999) は *fokussierung* を「新情報の焦点にする」という意味で用いており、本稿での焦点化に相当する概念には「前景化」の他に *zentrieren* (中心化する) という術語も用いている。「焦点化」という用語については検討の余地があるかもしれない。

- (14) a. Der Fremde begähnt die Witze. よそ者はその冗談にあくびをする。= (5)  
 b. Der Fremde gähnt. よそ者はあくびをする。
- (15) a. Ich werde die ganze Vorstellung behusten. 私は上演の間中咳をするだろう。= (6)  
 b. Ich werde husten. 私は咳をするだろう。

#### 4. 項の表示

ここでは上で提示した「be-動詞表現の本質は対格化に伴う項の焦点化である」という解釈を支持する論拠の一つとして、項の表示の可能性および必須度を考察する。

##### 4-1. be-動詞表現では対格化された項の表示が必須

ドイツ語では、対格目的語を取る動詞を他動詞と分類しているが、他動詞の対格目的語が全て必須というわけではない。たとえば *backen* (～を焼く) や *lesen* (～を読む) でも、*Sie bäckt heute.* (彼女は今日 [ケーキを] 焼く) や *Ich lese jetzt.* (私は今読書している) のように対格目的語を省くケースは少なくない。しかし be-動詞表現では、*begegnen* ([人<sub>と</sub>]に出会う), *beharren* ([auf ～に]固執する), *beruhen* ([auf ～に]基づく), *bestehen* ([aus ～から]成り立つ) など少数の自動詞を別にすれば、一般に対格目的語の表示が必須である。<sup>16</sup>

- (16) a. Er hat \*(die Wand) mit Bildern behängt. 彼は\*(壁に)絵を掛けた。  
 b. Er hat das Bild an die Wand gehängt. 彼は絵を壁に掛けた。  
 c. Er hat das Bild niedriger gehängt. 彼は絵を少し下に掛けた。
- (17) a. Beantworte bitte \*(die Frage)! \*(質問に)答えてくれ。  
 b. Antworte bitte (auf die Frage)! (質問に)答えてくれ。

例えば *hängen* ならば (16) c のように、「場所」を表す項を前置詞句として表示しなくても文が成立するが、「場所」を表す項が対格化される *behängen* の場合は、(16) a に見られるように、この項は必須の成分となっている。同じように *antworten* (答える) ならば (17) b のように「答える対象」を表す項を省くことも出来るが、「答える対象」を表す項が対格化される *beantworten* の場合はこの項を表示しないと文が成立しない。

対格化によってある項を焦点化したのならば、その項を文中に表示するのは当然である。したがって、be-動詞表現の対格目的語の表示が必須であるということは、この対格化された項が焦点となっているという解釈を支持する論拠の一つと考えることが出来る。

##### 4-2. be-動詞表現では〈対象〉(主に mit-前置詞句)は表されないことが多い

次は背景に退く項の表示について見てみる。一般に (主語となる項 x の他に) y と z という 2 つの項が関わる出来事を表現する場合、項 y を焦点化すれば項 z は相対的に背景に

<sup>16</sup> \*(die Wand) は *die Wand* を省略すると、文が非文法的になるということを表している。

退くと考えられる。たとえば「y に z を贈る」という行為を、受け手 y に焦点を合わせて表現すれば、贈り物 z の方は相対的に背景に退くことになるだろう。ここでは、コーパス調査によって be-動詞表現の用例に〈対象〉がどの程度の頻度で表示されているかを見てみる。今回は予備調査として beschenken (人に<sub>対</sub>物を mit 贈る), bestehlen (人から<sub>対</sub>物を mit 盗む), begießen (物に<sub>対</sub>物を mit 注ぐ), behängen (物に<sub>対</sub>物を mit 掛ける) という 4 つの be-動詞について、任意抽出によりそれぞれ 50 例を取り出し、be-動詞表現で背景化されることになる項 y の出現の度合いを調べてみた。<sup>17</sup> 項 y は、出現する場合は基本的には mit-前置詞句に、bestehlen の場合は um-前置詞句になる。結果は以下の通りである。

|                          | 事例数 | 〈対象〉表示あり    | 〈対象〉表示なし    |
|--------------------------|-----|-------------|-------------|
| jn. mit et. beschenken   | 55  | 18 ( 32,7%) | 37 ( 67,3%) |
| jn./et. um et. bestehlen | 54  | 1 ( 1,9%)   | 53 ( 98,1%) |
| jn./et. mit et. begießen | 50  | 26 ( 52,0%) | 24 ( 48,0%) |
| jn./et. mit et. behängen | 49  | 41 ( 83,7%) | 8 ( 16,3%)  |

この表から読み取れるように、〈対象〉を表す項が表示される頻度は動詞の意味タイプによって異なる。まず beschenken (贈る) では 55 例中の 37 例 (すなわち約三分の二) で (18) に見られるように「贈る物」が表示されず、bestehlen (盗む) では 54 例中の 53 例で「盗む物」が表示されていない。これらの動詞の事例では、be-動詞表現で〈相手〉が焦点化されるのに伴い、〈対象〉が背景化されているということが数値的にも明確に見て取れる。なお、今回の調査対象の中で「盗む物」が表示されている唯一の事例を (19) に挙げておく。

- (18) Ich **beschenke** zu Weihnachten meine besten Freundinnen und engsten Verwandten<sub>対</sub>. (Vorarlberger Nachrichten, 05.12.1998) 私はクリスマスに最良の親友たちと身近な親戚にプレゼントする。
- (19) Rosbacher<sub>主(受動)</sub> wollte spenden und wurde um 400 Mark bestohlen. (Frankfurter Rundschau, 18.01.1997) ロースバッハーは寄付しようとして 400 マルク盗まれた。

一方、begießen では 50 例中の半数を超える 26 例で、また behängen では 49 例中 8 割以上の 41 例で〈対象〉が表示されている。従ってこれらの事例からは、〈対象〉の背景化が beschenken や bestehlen の場合ほど明確に数値の上に現れていると言うことはできない。しかし、知覚という観点から言えば、移動物である〈対象〉 (すなわち begießen の「液体」および behängen の「掛ける物」) が本来ならば優先的に言語化されるはずであるのに、〈場所〉すなわち「液体の移動先」および「物を掛ける移動先」の表示よりも必須度が低いとい

<sup>17</sup> マンハイムのドイツ語研究所で公開している COSMASII (Corpus Search, Management and Analysis System) を用いて、それぞれの動詞の用例を Zufallauswahl (任意抽出) により 50 例ずつ取り出した。当該の動詞が複数回現れる文などもあるため、実際の数値は 50 にそろっていない。

う点に、be-動詞表現に置ける〈対象〉の背景化が現れていると考えることはできる。<sup>18</sup> ここでは〈対象〉が表示されていない *begießen* と *behängen* の事例をそれぞれ 1 つずつ挙げておく。(20) では文脈から「水」がかけられたことが予測でき、(21) では国旗に類する布類が掛けられたことが予測できる。

- (20) Während einer Trockenheit in den Sechzigerjahren wurden sie<sub>主(受動)</sub> (=Sequoien) beispielsweise vorsorglich von der Feuerwehr **begossen**. (St. Galler Tagblatt, 28.09.2001)  
60 年代の日照の間、たとえばそれら(セコイアの木)は念のため消防団によって**放水**された
- (21) Das Bildnis<sub>主(受動)</sub> wurde zuerst sogar mit rot-weiß-rot geschmückt, um wenig später jedoch stilgerecht **behängt** zu werden. (Kleine Zeitung, 13.07.2000) (スキー大会で米国チームを歓迎して) その像(=自由の女神の複製)はまず赤白赤に飾られたが、後にその場にふさわしく**飾り立て**られた。

なお、本稿では具体的な数値を挙げる準備はできていないが、〈対象〉を表示する mit-前置詞句 (*bestehlen* などの場合は um-前置詞句) が文に現れる場合でも、前置詞句内の名詞は無冠詞複数形や不加算名詞などがほとんどで、〈対象〉の輪郭が不明確な場合が多いということもここで付け加えておく。これも、〈対象〉の背景化の表れだと思えることができる。

#### 4-3. 〈対象〉を(原則として)表示できない be-動詞表現もある

4-2 では be-動詞表現で背景化される項が表示されないことが多くなる傾向があるということを示したが、ここでは背景化される項を表示する可能性がなくなるケースを見る。たとえば「相続する」という出来事には「誰が」「誰から」「何を」という 3 つの項が関与し、*erben* の場合はこの 3 つの項を全て表示することができるが、*beerben* だと「何を」を具体的に表すことができない。同様に「助言する」という出来事には「誰が」「誰に」「何を」という 3 つの項が関与するが、*beraten* だと「何を」を具体的に表すことができない。

- (22) a. etwas von jemandem *erben* 物を人から相続する  
b. jemanden *beerben* 人から相続する、
- (23) a. jemandem zu etwas *raten* 人に事を助言する  
b. jemanden *beraten* 人に助言する

次に *beerben* の用例を挙げておく。*beerben* が、「何を」という部分には眼を向けずに「誰が誰から相続するか」という部分だけを際立たせて表現する(プロファイルする)動詞だということが読み取れる。

<sup>18</sup> 今回は実施できなかったが、対応する基礎動詞 *gießen* および *hängen* について同じようにコーパス調査を行い、〈対象〉(つまり「注ぐ液体」あるいは「掛ける物」)がどの程度の頻度で表示されているかを確認することで、be-動詞表現における〈対象〉の背景化はより明らかになると考えられる。

- (24) Ältere Menschen haben oft eine klare Vorstellung, wer aus nachfolgenden Generationen sie<sub>対</sub> **beerben** soll, ... (Mannheimer Morgen, 09.01.1991) 年配の人達は、次世代の誰が自分達から<sub>対</sub> **相続**すべきか、はっきりとイメージしていることが多い（「何を相続するか」は表示不可能）

以上の、4-1 から 4-3 の考察は次のようにまとめることができる。be-動詞表現では、ある項が前景化されることにより、その項の表示が必須になる。それと同時に、別の項は相対的に背景化され、必須ではなくなる。さらに完全に背景に溶け込み、その項の表示が不可能になる be-動詞表現もある。

## 5. 意味的特徴 — 「全体的解釈」を中心に

次に、be-動詞表現に見られる具体的な意味の特徴に眼を向けてみよう。ここでは、しばしば議論されてきた「全体的解釈」を中心に考察する。

### 5-1. 全体的解釈 (holistische Interpretation)

be-動詞表現についての研究では、たとえば **den Wagen mit Heu beladen**（車に干草を積む）は「車が干草で満杯になる」と解釈される傾向があり、**die Wand mit Bildern behängen**（壁に絵<sub>複数</sub>を掛ける）は「壁全体に絵が掛けられる」と解釈される傾向があるとしばしば指摘されてきた。たとえば Pusch（1972: 128）は (25) の例文を挙げ、「ボール」が複数形の **mit Kugeln**（ボールで）ならば文法的だが、「ボール」を単数形にした **mit einer Kugel** だと不自然な表現になるとしている。

- (25) Er **behängt den Weihnachtsbaum mit Kugeln** / <sup>?</sup> **mit einer Kugel**.

彼<sub>主</sub> be-掛ける クリスマスツリー<sub>対</sub> with ボール<sub>複</sub> / <sup>?</sup> with ボール<sub>単</sub>

「ボール」が単数形の **mit einer Kugel** だと (25) が不自然になる理由を、Pusch は「たった 1 つのボールでは、それよりずっと大きいクリスマスツリーの『全体に影響を及ぼす』（„holistisch affizieren“）ことはできない」からだとして説明している。Pusch はさらに **bebildern**（挿絵を付ける＜Bilder 絵）、**bedachen**（屋根を葺く＜Dach 屋根）、**beflaggen**（旗を立てる＜Flagge 旗）、**beflecken**（しみを付ける＜Fleck しみ）など名詞派生の be-動詞も、**behängen**（＜hängen 掛ける）、**beladen**（＜laden 積む）、**besmieren**（＜schmieren 塗る）、**bestreuen**（＜streuen 撒く）などと同じように捉え、(26) のような意味構造を仮定している。（Pusch 1972:130）

- (26) **verursachen** [(jeder Teil von) X hat Y] =cause [(each part of) X hat Y]

たしかに be-動詞表現には、対格目的語として表される「場所」の全体に行為の影響が及ぶと解釈できる例もあるが、be-動詞表現ならばかならず「全体的な影響」を含意するとい

うことはできない。たとえば次の (27) では常識に照らし合わせてみれば「牛の体全体にカウベルがぶら下がっている」と考えることはできない。なお、下線部は *Ochsen* 対 *mit Kuhglocken behängen* (去勢牛にカウベルをぶら下げる) という句を基にし、動詞を過去分詞 *behängt* にして名詞 *Ochsen* を修飾している構造である。

- (27) Die sechs Stiere und ein paar mit Kuhglocken behängte Ochsen werden von „Kuhhirten“ aus dem Verschlag getrieben und durch die engen Gassen von Pamplona gejagt. 6 頭の雄牛と数頭のカウベルをぶら下げた去勢牛が「牛飼い」たちに板小屋から追い立てられ、パンプローナの狭い路地を駆り立てられる。

(27) の他にも「全体的な影響」を読み取ることが不可能な *be*-動詞表現を挙げることは難しくない。*be*-動詞の意味自体に「場所の全体に」という要素が組み込まれていると考えるのは、やはり無理があると考えざるを得ない。

## 5-2. Eroms (1980) : 「全体的解釈」は焦点化に還元できる

Pusch などの考察に対して、Eroms (1980: 22) は「全体的解釈」は場所句の焦点化から副次的に生じる効果だと述べている。

„Vielmehr ist für den weiteren Gang der Untersuchung von der Hypothese auszugehen, dass es (...) eine Fokussierung oder Topikalisierung in einem noch genauer zu bestimmenden Sinne ist, um die es sich bei der an die *be*-Verben geknüpften holistischen Interpretation handelt.“ 「むしろ本研究を進めるにあたって、*be*-動詞と結び付く全体的解釈は（以下の概念はより正確に定義されねばならないが）焦点化あるいはトピック化の問題だという仮定から出発するべきである。」

つまり、Pusch のように *be*-動詞の意味に「全体への影響」という意味要素を組み込むのではなく、場所句が焦点化されることから「全体への影響」という含意が生じるというのである。では、「場所」に焦点が合わされると、なぜ「全体的解釈」が出てくるのだろうか？ Eroms (1980) には具体的な説明は見られないが、成田 (1990) では Wegener (1985: 175) などから示唆を得て、*den Wagen mit etwas beladen* (車に何かを積む) を例にして次のような説明を試みた。

「...『何に荷物を積むか』に目を向ければ『何を積むか』という点に向けられる注目の度合いは低くなる。極端な場合は *Wir haben den Wagen schon beladen*. (私たちはその車はもう積んだ) のように『車に荷を積んだか』だけに目が向けられ『何を積んだか』は完全に視野の外に置かれる。(...) すると、特に *Wir haben den Wagen nur halb beladen*. (私たちはその車は半分だけ積んだ) のような限定がされない限り『積んである』ならば『一杯』で『積んでない』ならば『空』だと考えるのは自然なことである。」(成田 1990: 123)

に例文を挿入)

「全体的解釈」が生じるメカニズムの説明は影山編 (2001: 109ff.) にも見られる。影山編では、(a) John smeared paint on the wall. と (b) John smeared the wall with paint. のような英語の「壁塗り交替」を例に、(a) が「paint の移動」を表すのに対して、(b) は「wall の状態変化」を表すので「普通の場合なら、場所全面が影響されるという全体的解釈が得られる」(113 頁) と説明している。つまり「場所の直接目的語化⇒場所の状態変化⇒場所の全面」という図式である。基本的には本稿の説明もこれに近いと言えるが、英語の「壁塗り交替」に対応するもの以外の be-動詞表現 — たとえば *bewerfen* (〜に…を投げつける), *beraten* (〜に助言する), *betreten* (〜に立ち入る), *beantworten* (〜に答える) など — までは視野に入れると、「項 x の対格化⇒x の状態変化」というように直接関連付けするのは無理があると思う。be-動詞表現を広く捉えるためには、「項 x の対格化⇒x の焦点化」が基本であり、事柄の性質によっては「x の焦点化」から「x の状態変化」という意味構造が生じると考えるべきであろう。

### 5-3. 他の意味特徴

be-動詞表現の意味の特徴としては「全体的解釈」の他に、(a) 行為の結果に重点がおかれることが多い (*den Berg besteigen* (山に登る) は普通は「登頂する」と解釈される), (b) 対象への働きかけが強い (*jemanden bedrohen* (人を脅す) は *Duden* の大辞典では *jmdm. mit Gewaltanwendung drohen* 「ある人を暴力を用いて脅す」と記述されている), (c) 行為が非個別化 (あるいは抽象化) される (*Tanker können diese Route nicht befahren.* (タンカーはこのルートを通れない) は「タンカーの個々の航行」ではなく「水路の航行可能性」を表す) などがしばしば指摘されている。本稿では詳述する余裕はないが、これらの意味の特徴の多くも「対格化された項の焦点化」(および、「具体的・空間的關係の背景化」) に還元できると考えられる。

## 6. 方法論に関して

次に、be-動詞表現を例にして、言語研究の方法についての基本的な考えを述べておきたい。たとえば *jemanden beraten* (人<sub>対</sub> be-助言する) と *jemandem raten* (人<sub>与</sub> 助言する) の「意味の違い」を考えると、それぞれの動詞を用いた例文を作り、ネイティブスピーカーに表現の自然さを判定してもらうという方法を採用することがある。この方法は be-動詞表現についての先行研究にも多くの例が見られる。しかし、この方法は必ずしも上手く行くとは限らない。その理由の一つとして考えられるのは、ある表現を提示されると人は一般にその表現を何とか解釈しようとする傾向があるということである。リーチ (安藤訳 1977:9) には次のような叙述が見られる。

「人間の精神が意味の空白をきらうということは、意味論にとって論議の余地のない原



則であるように思われる。そこで、英語の話し手は、不条理な文に出くわしたときにも、自分の解釈能力を最大限に働かせて、その文の意味を読み取ろうとする。」

もちろん作例のインフォーマントによる判定という方法を全て否定するつもりはないが、事例の観察という方法もこれまで以上に重視するべきだと考える。次に、この方法の典型的な例と思われる事例を国広（1980: 269ff.）から引用し、そこに挙げられている事例（の当該箇所のみ）を引用の下に並べておく。

「ジョンハ彼女ノ心臓ヲナイフデ刺シタ」は自然であるけれども、「ジョンハ彼女ノ心臓ニナイフヲ刺シタ」は少し不自然である。その理由を探るために事例を調べてみよう。「刺す」について手元に集まった用例を「～に～を」型と「～を～で」型に分けてみると、その用法にきわめて明瞭な違いがあることが分かる。つまり、「～に～を」型では刺した結果何か有用な物が生産されたり、求める状態が生じたりする。すべては平和なできごとである。これに対して、「～を～で」型ではすべての例が傷害を目的とした行動を指している。

#### 「～に～を」型

串に肉片とわけぎを刺し続ける  
くろもじの木の枝にだんごをさして  
あの葉をちぎって土にさしておくと  
傍に、そのがじゅまるの枝を挿した  
鼈甲の簪をタボの右寄りに刺すと



「平和なできごと」

#### 「～を～で」型

知夫は短刀で腹を刺されて  
ジャックナイフで彼を刺したのだった  
注意した中川さんと奥さんを果物ナイフで刺して



「傷害を目的とした行動」

以下、この方法に倣って行なった be-動詞表現の事例研究（Narita 1992）から二つの事例を紹介する。

#### 6-1. 事例1：jemanden<sub>対</sub> beraten – jemandem<sub>与</sub> raten の分析

Mannheimer Korpus 1 と Limas Corpus には「助言する」という意味の jemanden<sub>対</sub> beraten は全部で 10 例あったが、具体的な「助言内容」が明示されている例は一つもなく、前後の文脈からも「助言内容」は読み取れなかった。beraten は (28) に見られるように「誰が誰の助言者であるか」という関係を主に表現するようである。一方、同じ「助言する」という意味の jemandem<sub>与</sub> raten は全部で 38 例あったが、いずれの事例においても具体的な「助言内容」が明示されているか、あるいは文脈から読み取れた。(29) ～ (33) の点線の下線部が「助言内容」である。

- (28) Es war (...) ein nobile officium des Hausarztes (...), die Familien<sub>対</sub>, die sich seiner Obhut anvertrauten, nicht allein in Tagen der Krankheit zu betreuen und zu heilen, sondern auch in Zeiten des Wohlbefindens bei allen wichtigen Ereignissen zu **beraten** (...). <LC> 病気のときに世話をし、治療するだけでなく、担当している家族に, 健康なときでも重要な出来事があったら**助言する**ということもホームドクターの立派な仕事だった
- (29) „Warten Sie erst mal das Ergebnis der ärztlichen Untersuchung ab.“, **riet** Bernie ihm<sub>与</sub>. <TPM> 「医者の診察結果をまずは待ちなさい」とベルニーは彼に**助言**した。
- (30) Aber der Portier **rät** uns<sub>与</sub>, wir sollten uns keinesfalls in ein Café setzen, das Fenster zur Straße **hat**. <WGS> 窓が通りに面した喫茶店には決して座らない方がいいとドアマンは私たちに**助言**する。
- (31) „Doktor Hollatz **riet** meinem Vater<sub>与</sub> immer, (...) vom Dorsch nur den Kopf zu essen.“. <LGB> ホラツ先生は父にいつも、鱈は頭だけを食べるようにと**助言**した。
- (32) Sie (=die Glucke 雌鶏) schützt und hütet es. Versucht ein Küken zu greifen, meine Lieben! Ich möcht's euch<sub>与</sub> nicht **raten**. Die Hände werden euch bluten. ... <LSO> 雌鶏はヒナを守る。ヒナを捕まえようとしてごらん。やめたほうが良いよ (=私は君たちにそうすることを**助言**したくない)。手が血だらけになるよ。(‘s=es は「そうすること」)
- (33) Man nimmt an, daß die Ärzte Dufhues<sub>与</sub> sehr nachdrücklich zum Verzicht **geraten** haben <ZFA> 医者たちがドゥッフヒュースに諦めることを強く**勧め**たものと思われる。

この分析結果から、jemanden beraten は助言の「相手」を対格で表すことで前景化し、その分「助言内容」が背景化しているということが明確に読み取れる。

## 6-2. 事例 2 : etwas<sub>対</sub> beantworten – auf etwas antworten

類義語辞典などの記述内容を要約すると, etwas<sub>対</sub> beantworten は「質問の内容にまともに答える」, auf etwas antworten は「質問の内容にまともに答えているかどうかは不問で、外交的に、あるいは質問をかわすように答えることも可能」ということであるが、コーパスから収集した実例観察では「答える対象」を表す名詞に違いが見られた。つまり, etwas<sub>対</sub> beantworten の etwas は, Frage (質問), Anfrage (照会), Brief (手紙) など「答えるべきもの」に限定されている。つまり, beantworten の対格目的語は「答える」という行為に本質的に取り込まれる対象に限られるようである。それに対して, auf etwas antworten の etwas は「答えるべきもの」には限られず, (34) の Formulierung (表現・言い方), (35) の Ausführung (詳述), (36) の Erklärung (表明) なども用いられていた。

- (34) Erhard antwortete auch auf die Formulierung Schmidts, ... <ZFA> エアハルトもシュミットの言い方に答えて (...と言った)
- (35) Er antwortete damit auf die Ausführungen des sozialdemokratischen Bundestagsabgeordneten Helmut Schmidt vom Vorabend. <ZFA> 彼はそう言って前の晩の社会民主党連邦議会議員ヘルムート・シュミットの詳述に答えた。

- (36) Erhard antwortete damit indirekt auf jüngste Erklärungen des Bundespräsidenten und des CDU-Vorsitzenden Adenauer. <ZFA> エアハルトはそう言って、連邦首相兼キリスト教民主同盟党首アデナウアーの最近の表明に間接的に答えた。

また、(37)に見られるように、antworten という動詞自体は「ある発言を受けて何らかの発言をする」という意味で用いられることもある。つまり「具体的な問いに答える」という意味には限定されていないようである。

- (37) Unsere Freunde, seien es Hunde, Katzen oder Pferde, können nicht sprechen. Sie haben zwar ihre eigene Sprache, die der Tierliebhaber sehr oft versteht. Aber wir können ihnen nicht in ihrer Sprache antworten. <ZB> 私たち〔人間〕の仲間 — 犬であれ、猫であれ馬であれ — は話すことができない。彼らは確かに自分の言葉を持っていて、動物愛好家にはそれがわかることも多い。でも私たちは彼らに彼らの言葉で応じてあげることはできない。

4-1 で見たように beantworten の対格目的語は必須の成分であるが、このことも合わせて考えると、以上の事例観察の結果から antworten が「答える人」の行為の方に焦点を合わせている（言わば「どう答えるか」を問題にしている）のに対して、beantworten は「答える対象」に焦点を合わせている（言わば「何に答えるか」を問題にしている）という違いが見えてくる。

## 7. おわりに — どの程度「交替」と捉え得るか

最後に be-動詞表現と基礎動詞表現の関係をどのように考えるかという問題についても触れておく。一般に派生関係にあるとされる複数の表現についての研究では、例文のペアを挙げて論を進めるという考察が多い。この方法は be-動詞表現についても、たとえば Eroms (1980) などに典型的に見られる。例文をペアで示すことは、たしかに考察対象となっている複数の表現の違いを明確にするためには有効だが、be-動詞表現と基礎動詞表現のペアが成り立つ — つまり、同じ事柄を be-動詞表現でも基礎動詞表現でも表し得る — という前提がそもそも妥当かどうかということも多少は省みる必要があるように思われる。<sup>19</sup>

たとえば begießen と gießen については多くの先行研究に die Blumen [mit Wasser] begießen（花に〔水を〕やる）と Wasser auf die Blumen gießen（水を花にやる）というペアが挙げられている。たしかにどちらもドイツ語として容認され、また実際に使われる表現ではあるが、begießen および gießen がそもそもどのような使われ方をしているかということを観察し、また頻度も考慮に入れると、上述の2つの表現を並べて論を進めることが必ずしもド

<sup>19</sup> たとえばカン (2005) ではこの問題を「使役交替」を対象に考察している。

イツ語の言語使用の実態に沿っているとは言えない。<sup>20</sup> begießen と gießen それぞれの実例を見比べると、表す事柄の違いがかなり大きい場合もあるということがわかる。ドイツ語研究所のコーパスから任意抽出により begießen と gießen の用例を 50 ずつ見たところ以下のような結果を得た。

- begießen の用例 50 : 24 例 (48%) が「飲んで祝う」の意味。9 例 (18%) が調理で「肉にソースをかける」の類。「花・植物に水をやる」は 50 例中 2 例のみ。
- gießen の用例 50 : 「型に流し込んで作る」が 17 例、調理 8 例、「土砂降り」7 例、Öl ins Feuer という成句が 6 例。begießen の典型的なパラフレーズである etwas auf/über etwas gießen に該当する例は 3 例のみ。

つまり、構文パターンとしては対応関係が認められても、項に入る具体的な名詞の種類や表される具体的な出来事のタイプは（場合によってはかなり）異なるようである。最近の研究にも Michaelis&Ruppenhofer (2001) のように be-動詞表現に対応する基礎動詞表現の交替表現 (alternation) として捉えるのではなく、be-動詞に特有の構造 (construction) から出発して様々な be-動詞表現を意味的に関連づける試みもあるようだ。本稿の第 2 節で取り上げた Günther (1974) の „rules of word-formation are statements on existing lexical relationships rather than processes which generate lexical entries.“ (S. 256) という一節を今一度見直す必要があるように思われる。

## 参考文献

- Bußmann, H (2002) Lexikon der Sprachwissenschaft. 3., aktual. u. erw. Auflage. Stuttgart: Alfred Kröner Verlag
- Dürscheid, Chr. (1999) Die verbalen Kasus des Deutschen. Berlin: de Gruyter.
- Eroms, H.-W. (1980) Be-Verb und Präpositionalphrase. Heidelberg: Carl Winter.
- Eroms, H.-W. (1981) Passiv erster und zweiter Stufe. In: Kohrt M. u. J. Lenerz (Hg.): Sprache: Form und Strukturen. Akten des 15. Linguischen Kolloquiums Münster 1980. Tübingen: Niemeyer.
- Günther, H. (1974) Das System der Verben mit BE- in der deutschen Sprache der Gegenwart. Ein Beitrag zur Struktur des Lexikons der deutschen Grammatik. Tübingen: Niemeyer.
- Günther, H. (1987) Wortbildung, Syntax, be-Verben und das Lexikon. In: PBB (Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur) 109, 179 – 201.
- Helbig, G. (1992) Probleme der Valenz- und Kasustheorie. Tübingen: Niemeyer.
- カン・ミンギョン (2005) 状態変化動詞と使役交替. 敦賀陽一郎他 (編) 『言語情報学研究

<sup>20</sup> なお、google で検索した限りでは、「花に水をやる」は die Blumen gießen と言うことが圧倒的に多いようである。„die Blumen begießen“は 7 件ヒット、„auf die Blumen gießen“は 10 件ヒット、„die Blumen gießen“は約 1560 件ヒットした (2003 年 10 月 16 日の調査)。

- 報告 7』所収 339-442.
- 影山太郎編 (2001) 「日英対照 動詞の意味と構文」大修館.
- 河上誓作編著 (1996) 「認知言語学の基礎」研究社.
- 国広哲弥編 (1980) 「日英語比較講座 第 2 巻 文法」大修館.
- Leys, O. (1989) Aspekte und Rektion räumlicher Präpositionen. In: Deutsche Sprache 17/2, 97 – 113.
- リーチ, ジェフリー／安藤貞雄監訳 (1977) 「現代意味論」研究社.
- Maylor, B. R. (2002) *Lexical Template Morphology. Change of state and the verbal prefixes in German*. (SLCS 58). Amsterdam: John Benjamin.
- Michaelis&Ruppenhofer (2001) Beyond Alternation. A Konstruktional Model of the German Applicative Pattern. Stanford: CSLI Publications.
- 成田節 (1990) 「4 格化」と文の意味 — be-動詞表現を例にして —. 富山大学教養部紀要第 22 巻 2 号 117-128.
- Narita, Takashi (1992) Akkusativierung und Satzbedeutung — eine Korpusanalyse an Beispielen mit be-Verben —. 富山大学教養部紀要第 24 巻 2 号 117-128.
- 成田節 (1995) „Perspektive“の概念について — 構文研究の観点から —. 大阪市立大学文学部紀要第 47 巻第 10 分冊 161-178.
- Oksaal, E. (1972) Zentrierung und Satzperspektive. In: Sprache der Gegenwart 19, 126 – 158. Düsseldorf: Schwann.
- Oksaal, E. (1973) Betrachtung im Bereich des Passivs. In: Sprache der Gegenwart 24, 165 – 172. Düsseldorf: Schwann.
- Polenz, P. v. (1985) Deutsche Satzsemantik. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Pusch, L. (1972) *Smear = schmieren / beschmieren*: Bemerkungen über partitive und holistische Konstruktionen im Deutschen und Englischen. in: Nickel, G. (Hg.) Reader zur kontrastiven Linguistik. Frankfurt/M: Athenäum Fischer.
- 柴田武他 (1976) 「ことばの意味 辞書に書いてないこと」平凡社.
- 寺村秀夫 (1982) 「日本語のシンタクスと意味 I」くろしお出版.
- 辻幸夫編 (2002) 「認知言語学キーワード事典」研究社.
- Wegener, H. (1985) Der Dativ im heutigen Deutsch. Tübingen: Gunter Narr.
- Welke, K. (1988) Einführung in die Valenz- und Kasustheorie. Leipzig: VEB Bibliographisches Institut.
- Welke, K. (1993) Funktionale Satzperspektive. Ansätze und Probleme der funktionalen Grammatik. Münster: Nodus Publikationen.